（第3種郵便物認可）

ルポ 潮流

大阪・釜ケ崎 異色の宿

生活の中にある芸術

労働者と美術家が協働

日雇い労働者の街として知られる大阪・釜ケ崎に、現代美術家と街の〝おっちゃん〟が協働してつくった異色の宿がある。昨年オープンした「ゲストハウスとカフェと庭ココルーム」。一体どんな空間なのか。体感すべく、釜ケ崎を訪ねた。

フリーダ・カーロやチェ・ゲバラ、アインシュタインにマリリン・モンロー…。ココルームの特別室「森村泰昌ルーム」は、まるで小さなギャラリーだ。壁一面が作品ポスターに覆われ、どこを向いても森村さんが扮（ふん）した「誰か」と目が合う。ポスターの隣にあるのは、地元の日雇い労働者、坂下範征さんによる数編の詩。

「誰かが我より／先に生まれたこと／誰かが我より／先まで生きるということ」

壁に貼られた歴史上の人物たちが、ささやく言葉のようにも読める。

坂下さんと世界的な美術家である森村さんが、ここでは対等の表現者。2人をつないだNPO法人「こえとことばとこころの部屋（ココルーム）」代表で詩人の上田假奈代さんは言う。

「おっちゃんたちの表現は、奇想天外でとにかく面白い！　これは、次世代を生きるための知恵になると思うんです」

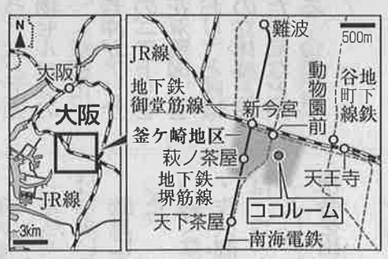
上田さんが釜ケ崎の商店街にカフェを開いたのは2008年。日雇い労働者の高齢化や孤立化が進み、街の様相が大きく変わり始めた時期だ。

「生活保護を受け、精神的な負い目から引きこもる人が増えた。店で待っていてもおっちゃんたちは来てくれない。交流を促すためのきっかけが必要でした」

11年には、地域の施設を会場に、詩やダンスなどの表現を行うワークショップの「出前」を始める。当初から参加したのが、妻の死をきっかけにアルコール依存症になり、断酒を始めたばかりの坂下さんだった。

ワークショップに参加後、坂下さんが「酒は抗酒剤ではなく、人生の楽しみでやめるんだ」と言うのを聞いて、上田さんはハッと

ココルームでの昼食風景。上田假奈代さん（右端）やスタッフ、地元の人々らが、一緒に食卓を囲む　＝大阪市西成区



しかし、街には新たな変化が押し寄せる。数年前からココルームのある商店街に外国人経営のカラオケ居酒屋が急増。おっちゃんたちの関心や生活費が、仲間との交流よりも娯楽に向かうようになってしまったと上田さんは感じている。

他の支援団体から「この街に芸術なんて…」という声が上がったこともある。「どうやってココルームや『釜芸』の求心力を保っていくか。正念場です」と上田さんは吐露する。

ゲストルームを訪ねた日、ココルームの近くで開催された釜芸の詩の講座に、記者も参加した。「詩」と聞くだけで肩に力が入ってしまう記者とは違い、おじさんたちは気負わず、するすると言葉を紡いでいく。参加者の一人、日雇い労働者のアーサーさん（仮名）はこう語った。「詩なら、自分の内側の深い部分を見せることができる」

「表現とは、生きていくためのすべ」。上田さんの言葉が頭に浮かんだ。

〈随時掲載します〉

文化

「釜芸」展覧会 静岡で開催中

釜ケ崎芸術大学（釜芸）の「生徒」であるおっちゃんたちの作品を集めた展覧会「釜芸がやってきた！」が、静岡県三島市の大岡信ことば館で開催されている。笑いあり、涙ありの雑多でパワフルな作品からは「芸術って一体なんだ？」という声が聞こえてくる。

「学びたい人が集まれば、そこが大学」というコンセプトで始まった釜芸には、詩人の谷川俊太郎さんや、哲学者の鷲田清一さんらも賛同。会場では、おっちゃんたちの「つぶやき」を立体化した作品が、来場者を迎える。

「就職列車で来たからね」「ここはホンマの自由やから」「ぼくは罪深い男だ」ユーモア、諦め、喜び、希望…。言葉と一緒に、それぞれの人生が立ち上がってくる。他にも絵や書、詩に仏像など多種多様な作品がコラージュのように並ぶ空間は、不思議な明るさと一体感に満ちている。人が生きることの悲哀を受け止めてきた、釜ケ崎という街そのものの雰囲気なのかもしれない。

ココルームの「森村泰昌ルーム」　＝大阪市西成区

四季録

2月26日に、北宇和郡松野町で「第63回芝不器男忌俳句大会」が開催された。26歳で亡くなり、今も多くの人に愛される句を残した俳人芝不器男を偲んで、毎年町内外の俳句愛好者が集まる。今年は、芝不器男記念館落成30周年でもある。

私も、3年前から大会の選者に加えていただいた。今回は、児童生徒部門の選者を代表して、講評の役が回ってきた。

一番乗りした控室で、もごもご予行演習をしていると、大先輩の谷岡甚城さんが入って来られた。まっすぐ窓辺へ向かわれ「田んぼに鴉がいますね。何か食べるものがあるのでしょうか」。一羽の鴉が土を啄（つい）ばみながら歩いている。甚城さんは、不器男の〈寒鴉己が影の上におりたちぬ〉の句を思い浮かべたのではないだろうか。それには触れず「ようやく春が近づいたようです。まだ油断はできませんが」と言って、席に戻られた。緊張が解けていく気がした。

壇上中央に置かれた不器男の写真に黙とうを捧げて、大会は始まる。来賓席には、不器男の養子先である太宰家の現在の当主、太宰豊子さんの姿もあった。

私は、声が裏返ったりしながらも、何とか与えられた5分の講評を終えた。児童生徒部門3319句の中から選ばれた、きらめく俳句の一部を紹介したい。

〈ふゆのまどオレンジいろのき車はしる　三島小1年　岡本琉愛〉〈ふゆうならばこび　泉小1年　渡邊海翔〉〈夏の空海ごとひっぱるじびきあみ　家串小2年　兵頭海音〉〈トラックがおしつぶされそう早生みかん　立間小3年　河野舜祐〉〈路線図が星座に見える時雨かな　番城小4年　山﨑幹大〉〈冬の夜一つの明かり選果中　九町小5年　成本奏〉〈ひそひそと夜寒の中のピカソかな　五十崎中3年　上田稔真〉〈迫る空に吸い込まれそうな敗戦忌　城北中3年　小野下香織〉など。

「芝不器男記念館」は、不器男の生家であり、所有者となった元松野町長の岡田倉太郎さんの遺志を継いだ岡田博氏が、松野町に寄贈されたもの。倉太郎さんは子どもの頃、学生だった不器男によく勉強を教えてもらった。沢の辺に童と居りて蜘蛛合（くもあ）ふ　不器男

蜘蛛は夏の季語で「蜘蛛合」は、2匹の蜘蛛を小枝の棒切れに止まらせて戦わせる遊び。生家は広見川のすぐ近く。

不器男のめいの疋田不踰子さんが、かつて話してくれたエピソード「倉さんたち子ども3人くらいが、不器男にぶら下がって歩いてました」を思い出す。

（谷　さやん・俳人）

愛媛歌壇

縦割りの白菜ひと夜に膨らみて生ふるがごとく新芽つき出る　松前　藤田　和子

【評】外からは見えない植物の生命力。「白菜」を丹念に表現してさわやか。

包丁に水したたりて大根を千六本に切る寒の入り　岐阜　松井　正子

【評】大根を包丁で料理するときの発見、みずみずしい厨の作。短歌の素材は身辺に存在する。

シラウオの祭り終へたる川面にはテールランプの滲みて往けり　宇和島　児島　敏博

【評】児島さんの住む津島町に春を告げる「シラウオの祭り」。川の描写が印象的。

銀行から届きし品で誕生日吾は知りたり八十一歳　松山　佐伯　順子

海峡を三段跳びする大橋を支えて小島は渦潮を生む　同　宇和上　正

性善説を信ずる夫と五十年「あらら」「ほら」の幾度ありしか　為替とり訂正おはようから掛け

膝に抱き猫を合ひて透析を告げられたり

退院の母に見さよならを着画面

独唱の歌詞に鋼に手を脚にあつ切りの大い出の味

俳誌

大宰府へ 9世紀の

福岡・大野城

福岡県大野城（みずき）跡（国で、古代律令（国家の機関・大9世紀ごろの官が見つかり、このほど発表使節が通ったと構造を知る手そうだ。

側溝跡は、大施設だった土門跡の外側で底の幅は約2・深さは50～60とみられる。これ結果と合わせ、ていたことが確官道は、大宰

れ（号）より、板倉肱泉に君や年の暮止場にはカメ日、武田フサぶ柿吊るす十予市宇和町皆れんげ草発行所花（1月）「作原貞美「洛北の前菊白し」「矢十歩で渡る浄